

大川周明

イスラームと天皇のはざままで

著者は、中東研究に関する世界では、おもしろおされなっている。制度化された第一入者であり、地域研究という枠の中だけでも大きな仕事をこなして来た。しかしそれだけでは不満足なのである。いわずもがな、今日の世界構造において中東地域は、最も苛烈に

「暴力」がさく裂する場となっていて。制度化された狭義の地域研究の枠組みによつては語り得ぬもの、つまり観察主体にかかわる歴史批評へと著者は大きく足を踏み出すことになったのである。

本書は、日本の中東研究

の原初光景にありながら、戦後の知的環境においては「大東亜戦争」のイデオログとして無視されざるを得なかった大川周明の、特にイスラーム研究にかかわる思想変遷に照準を合わせたものである。その思想変遷の要因となるものは、二〇年代から四〇年代にかけて最も屈折の大きい時期に際し、日本国家が経験した危機への対応とその挫折のプロセス（及び、イスラーム国家それ自体の同時代史における世俗国家化の趨勢）など、それら現実過程に濃密に向き合うことで生じたものである。そこでキ

ーポイントとなるのは、イスラームの教えの中の分節性であった。主だって採り上げられているのは、「外面的生活における律法的イスラーム」と「内面的生活における精神的イスラーム」の二重性である。著者は、そういった幾つかの手掛かりを用いながら大川

の原初光景にありながら、戦後の知的環境においては「大東亜戦争」のイデオログとして無視されざるを得なかった大川周明の、特にイスラーム研究にかかわる思想変遷に照準を合わせたものである。その思想変遷の要因となるものは、二〇年代から四〇年代にかけて最も屈折の大きい時期に際し、日本国家が経験した危機への対応とその挫折のプロセス（及び、イスラーム国家それ自体の同時代史における世俗国家化の趨勢）など、それら現実過程に濃密に向き合うことで生じたものである。そこでキ

う著者のモティベーションの強さであった。序章から「大東亜戦争」のイデオログとして無視されざるを得なかった大川周明の、特にイスラーム研究にかかわる思想変遷に照準を合わせたものである。その思想変遷の要因となるものは、二〇年代から四〇年代にかけて最も屈折の大きい時期に際し、日本国家が経験した危機への対応とその挫折のプロセス（及び、イスラーム国家それ自体の同時代史における世俗国家化の趨勢）など、それら現実過程に濃密に向き合うことで生じたものである。そこでキ

思想変転の仕組みを解き明かす

戦後日本の知のあり方を規定し直す

丸川 哲史

として自立し得ず、多分には、大川の思想は自立した道義国家的な構想へのコミットを通じてのみ多くのインテリがインテリとして生きていた。しかして今日の断層がある。つまり、戦後新憲法は、不完全ながらも第二次大戦の敗北を通じての中性国家を目指す日本を表現するものであり、その統制的理念に対応するように政治／文化制度が構成された、と言えるからだ。しかも米軍の占領政策は、その中性国家の程度を国際状況の要請から、あるところ

に止めることにもなった（象徴天皇制）。いずれにせよ、戦後日本における中性国家なる構想は、移植として、また不徹底に始まったものであり、国家に道義性を求めようとする明治維新以来の日本インテリの伝統は、いわば中吊りにされたことになる。戦後において、中性国家を観想的な場で考えた場合に

事に関して思想に独立性があること、さほどこ容易に理解できることではない。一つの理解の補助線を引きならば、その時代、戦後発近代として始まった日本国家は、西洋一般的な文脈でいうところの中性国家

は、その理解の補助線を引きならば、その時代、戦後発近代として始まった日本国家は、西洋一般的な文脈でいうところの中性国家

大川周明

臼杵 陽

天竺国往
アジア主義
東京裁判
真相を
解く鍵としての
イスラーム

四六判・340頁・2520円

青土社

978-4-7917-6556-0